

## 1. 全校研究テーマ

「自立的な生活と社会参加」の実現に向け、  
一人一人が生き生きと活動するための授業作り

## 2. 全校研究の経緯

### 【研究のための視点】

- ①情報の共有（本校の研究の根底） ②個別の指導計画（可能性の芽と評価）  
③できる状況作り ④TTのあり方

近年、学習グループによって、また学習グループ内においても実態の幅が大きくなってきている。一人一人が主体性を発揮し、生きる力を高めるためには、教師が目の子どもたちに寄り添って、よりよい支援のあり方を考えていく必要がある。そこで、日常の授業改善につながる研究を大切に、一昨年度から研修や類型会との連携を図りながら授業を見直す機会を設けてきた。

本研究テーマになり、今年度は4年次となる。将来に向けての「今」を意識し、日々の授業の充実を目指した研究に昨年度に引き続き行うこととする。個の授業力アップをテーマとし、一人1授業公開を中心とした各部のニーズに応じた研究を行う。ビデオ検討等を通して多くの目で授業を見返し、よりよい授業実践を積み重ねていくことを大切に考えたい。

## 3. 研究の構想

### （1）各部研究テーマについて

今年度も昨年度同様、全校研究テーマで統一し、各部の研究の柱となるテーマを、全校研究テーマのサブテーマとして設定する。各部のテーマ（全校のサブテーマ）のもと、「研究のための視点」を設定し、それに基づいて各グループで部研究を進める。

### （2）研究の重点

- ① 各部の研究
  - ・ 一人1授業を中心としたよりよい授業の追究、指導案とビデオを使った授業研究会
- ② 類型会での縦の連携と研修会との連携
  - ・ 各類型における視点を決め、日々の授業の情報交換や研修会などを計画・実施
  - ・ 外部の講師による研修（研修係との連携）
- ③ 個別の指導計画の作成と活用
  - ・ 子どもたちの可能性を把握、指導内容と手だて、評価の検討
  - ・ 形式の検討（学校生活全般についての内容が記述されるように）
- ④ 教育課程のあり方
  - ・ 各部が、学習指導要領に基づいた、児童生徒の実態に即した教育課程を編成する。

## 4. 運営について

講師の先生等の研修については、部研究や類型会の時間に行い、日々の授業の充実のため、教材研究や情報共有の時間を多くとる。講師の先生方の都合で月曜日以外に研修等が入った場合は、月曜日には部研を行わないなど各部で工夫する。

### （1）全校研究会

- ① 全校研究はじめの会（5月7日）
  - ・ 全校研究の立場、本年度の研究の重点、研究方法について共通理解を図る。
  - ・ 各部の教育課程、各部の研究計画の概要確認。
- ② 全校研究授業及び授業研究会について
  - ・ 今年度の全校研究会は小学部。（来年度は高等部、再来年度は中学部）
  - ・ 全校授業研究授業者以外の職員は昨年度同様一人1授業公開を基本とし、研究を推進

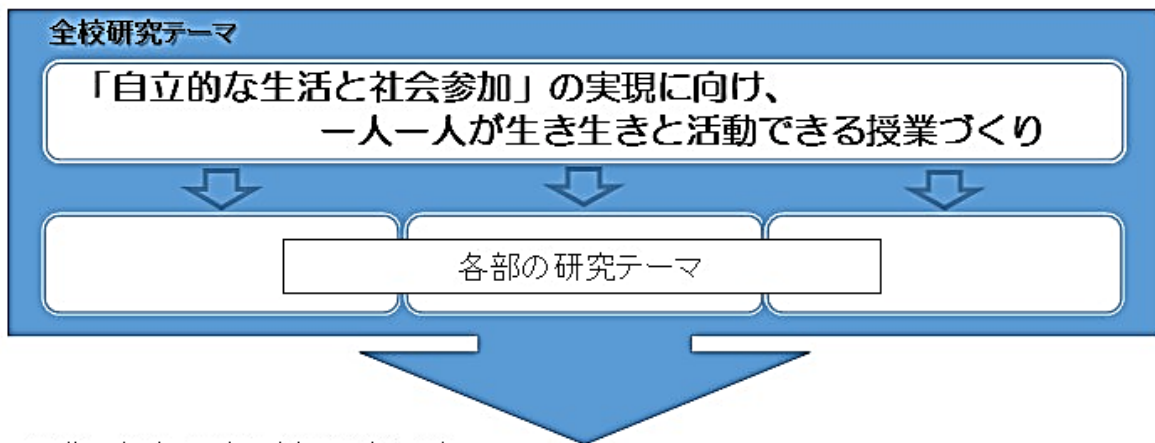
する。授業参観については、ビデオ撮影を行い、部研や類型会でビデオ検討を行う。ただし、各部（グループ）研究の視点に基づいて、別の方法（対象児生についての事例検討等）で授業づくりについて追究していくことも柔軟に対応していく。

- ・ 1 授業公開を行わない先生については、自立活動係と連携して、『自立活動実践事例集』として1年の取り組みについてまとめる。

③ 全校研究まとめの会（2月25日）

- ・ 『研究紀要』をもとに各部の実践と成果を確かめ合い、意見交換をする。
- ・ 次年度の研究に向けての方向性を検討する。

(2) 部研究会・類型会（毎週月曜日） 下表参照



平成30年度 研究で大切にしたいこと

① 個の授業力アップ ② みんなで学びあう研究会 ③ 縦のつながりを意識して

**部研究**（各類型グループごと）

- ◎ 各部のテーマから類型ごと視点を設け、授業づくりについて追究する。  
 <研究の方法>  
 ≪全校研究授業 授業研究会≫  
 小学部で行う。詳細については今後検討。  
 ≪一授業公開を行う先生≫  
 授業案（略案）作成  
 →グループで意見交換  
 （→必要に応じ修正）→授業（VTR撮影）  
 →VTRでの検討  
 →その後の授業に生かす、改善  
 →授業を通して、自分の授業づくりについて振り返り、まとめる。  
 ≪通年で、自己の課題を追究する先生≫  
 自己の課題を設け、それについて通年で授業づくりについて追究する。  
 →年度末に『実践事例集（仮）』として、それぞれの実践についてまとめる。

**類型会**（年7回）

- ◎ 各類型の視点に沿って、基礎基本の研修を行ったり、他部の授業を見合ったりして、児童生徒の障がい特性に応じた授業づくりについて情報交換し合う。  
 ≪一年の大まかな流れ≫  
 ①はじめの会 類型の基本研修  
 ②～⑥  
 ・各部の授業から学び合う  
 ・授業のVTR検討  
 ・年間計画、単元の情報共有  
 ・授業の題材、教材の情報共有  
 ・類型の児童生徒に生かせる内容の研修 etc…  
 ⑦まとめの会 1年のまとめ

### (3) 個別の指導計画の作成と活用

- ・ 前年度末に前担任が作成した指導計画を、新担任が4・5月の実態と合わせて検討し、前期の個別の指導計画を作成（各部とも5月中に冊子に）する。個別の指導計画は常に見返し、必要に応じて加除修正していく。
- ・ 前期末の評価をもとに、後期の個別の指導計画を作成する。（11月中に）
- ・ 「個別の指導計画」作成 → 日々の授業 → 評価として「努力のあと」作成 → 見返しを行い、新たな「個別の指導計画」 → 日々の授業 → 評価として「努力のあと」…とPDCAサイクルでリンクするように作成していく。
- ・ 個別の指導計画や評価がスムーズに作成・検討できるよう、個別の指導計画作成検討週間、努力のあと作成検討週間を設ける。（すでに年曆に記載済み）  
また、研究係とコーディネーター会で、4月の個別の指導計画作成週間中、職員室にて「個別の指導計画サポート部屋」を開設し、作成における質問や相談ができるような体制を整える。
- ・ 作成にあたり、自立活動の観点、キャリア教育の観点との関連を教師が意識できるよう、内容の周知を図りながら、全員で確認しながら作成を進めていく。

### (4) 教育課程のあり方

- ・ 教科学習グループの児童生徒においては、教科学習の中で自立活動に関する内容を行う必要があり、学習活動の中に自立活動のねらいや内容が明確にしていく必要がある。また、準ずる教科の児童生徒の学習については、各教科の時数が足りるよう教育課程の工夫をするとともに学習内容も準ずる内容になるように計画する。
- ・ 合わせた指導の教育課程は、生活単元学習や作業学習で、どの教科を合わせて指導を行っているのか明確にし、年間計画を立ててさまざまな体験や学習を通して付けた力を明確にする必要がある。また、児童生徒の実態に合った教科学習も位置付ける。
- ・ 自立活動を主とした教育課程については、個別の自立活動の時間を確保し、丁寧に自立活動を行っていく。集団で行った方が明らかに効果が上がる場合には、集団の自立活動を行うという前提を念頭に置いて教育課程を考える。また、部で「体育」「音楽」などの教科の学習を行う場合には、自立活動ではなく教科の目標（含 知的障害特別支援学校の指導要領）を立てて行う。
- ・ 学習指導要領の改訂に伴い、カリキュラム・マネジメントの確立が求められている。学校全体として、教育内容や時間の適切な配分、必要な人的・物的体制の確保、実施状況に基づく改善などを通して、教育課程に基づく教育活動の質の向上を図っていくとされている。学校全体としてどうしていくのかを検討し推進していく。
- ・ 来年度の教育課程編成のために、センターとのリハプログラムの調整を行っていく。